

「終の棲家か」

2014年4月23日

私たち夫婦の「終の棲家」になるのであろうか。住まいは団地の三階である。南向き三部屋の間取りが気に入った。団地群のはずれで、南向きの私の書斎の窓からは、他の棟はなく、大木になった桜とケヤキともみじの木々が新芽をふいて、緑鮮やかなのが見える。その向こうに二階建ての住宅が並んでいる。北側の窓の下には花壇があり、つつじやふじが、今を盛りに咲いている。その隣は「養護学校」の校庭があって、遮る建物はない。子どもたちがサッカーなどに興じている。遠くに、高層の団地群があり、明かりが灯った夜景はきれいである。南も北も開けていて、開放感があり、暇があると、南北の窓から外を眺めて楽しんでいる。

今年は、桜を堪能した。春を待ち満を持して、ちらほらと咲き始める。そして満開となる。花見に出かけなくても、毎日が豪華な花見であった。それから、風に吹かれて、散っていく。散る「潔さ」を日本人は好んだようだが、分からなくもない。散った後、赤い額が残り、その色合いが美しい。それから、新芽が吹いてきて、きれいな緑と化す。桜の移り変わりを、思う存分楽しむことができた。

ケヤキの大木が二本ある。一本は、早くから芽を出し、淡い緑から、濃い緑に変化している。ところが、もう一本は、なかなか芽を出さない。妻は、枯れているのではないかと、しきりに言ったが、幹は生氣にあふれている。私は、そのうちに芽を出すよと答えていた。芽を出してきた。木も、人間と同じように、早生と晩生があるらしい。これらの木々に、色々な小鳥が飛んでくる。それを見るのが、また、楽しい。

ベランダには、バラが十数鉢、母の形見になった牡丹と白いつつじ、そして、ふじ、ぼけ、ミルトスなどの鉢が、ところ狭しと並んでいる。前の牧師宅は、広いベランダがあり、夏は照り返しがきつかった。妻は、せつせと鉢植えに励んだ。そこから、移転してきた鉢々である。

バラが多い。葬儀や結婚式があった時、いただいた花を、妻は挿し木した。枯れたものもあるが、見事についたものは、今小さなつぼみをつけ、咲くのを待っている。見るたびに、これは「誰々さんの葬儀の花」、これは「誰々さんの結婚式の花」と言っている。

今までは、教会に仕え多忙であった。それが生きがいであった。こんなゆったりした毎日でよいのかと自責の念に駆られてもいるこの頃である。